

昭和35年1月10日

第14群 新生児（生理）に関する問題

253—99

り、測定しやすいことが分つたので爾後総て除蛋白したものを使用した。トリコモナス虫体陽性患者で発赤（一）の者13.5%、直径1.0cc以上の者75.5%あり、これに反しトリコモナス虫体陰性患者では発赤（一）の者71.4%直径1.0cc以上の者9.5%であつたが、尚例数をふやして観察中である。又反復注射による治癒促進効果、再発率、ラッセル氏小体に対する影響については現在検索中である。

157. 超音波反射法による産婦人科疾患診断法（第3報）

（国立清瀬） 石原啓男

（大宮日赤） 室岡 一

超音波反射法を応用して、種々の産婦人科疾患の診断を試みて、可成りの成績が得られた事は、既に第19回日産婦学会関東地方部会（第1報）並びに、第11回日産婦総会（第2報）に於て発表した所であるが、其の後私達は症例を重ね現在迄180例に達し、新たな所見及び詳細な分析が得られたので、ここに第3報として報告する。

実験装置は、日本無線製超音波探傷器 USF 5 C型の改良型、探触子は医学用特殊水晶発振子、使用周波数は0.5M.C/sec~10M.C/sec. 超音波発振方法は経腹壁法、経子宮腔部法経子宮腔円蓋法を採用した。共に振動子を被検体に直接、接着する直接法を用いたが、一部に被検体と振動子の間に水を介する水浸法を試みた。

実験成績：子宮筋腫については、和賀井の成績では、

筋腫核及び子宮内腔の反射波を認めたというが、私達の実験では、10MC使用時には明らかに之を認めるも、5MCで感度7に於いては筋腫に於いて、何ら反射波は認められず、而も此の場合、妊娠子宮に於ては着床部位より、明らかな反射波が得られるので、此の条件では両者の鑑別は可能である。粘膜下筋腫の場合で、所謂筋腫分娩の形に發育したものでは、時に妊娠子宮と類似の如き反射を示す事があるが、波形を仔細に検討すると、判読する事が出来る。又、胎状奇胎に於ては妊娠時と同様に、超音波の伝播力は強いが子宮腔内反射波は、妊娠とは可成り異つた反射波が得られた。

子宮癌は、屢々子宮腔部びらんと区別の困難な事があり、種々その検索法に改良を加えたが、剔出標本では、びらんは全例反射波はなく、子宮癌では明らかに癌性エコーが生ずる事が確実なので、此の点追求した結果振動子の接着不十分に多くの原因のある事を知り、振動子にラノリン或はヒマシ油等を塗布し確実に組織に接着する事により好結果が得られた。しかし体癌の症例はなく、又子宮癌0期に於ては未だ明白な癌性エコーは検索不能であり、今後の実験に俟たなければならない。

産科領域に於ては、胎位の診断の為、振動子を恥骨結合上1~2横指上の所に当て超音波を入射して検索したが、頭位では明かな頭蓋の反射波を得、骨盤位にては複雑な骨盤の反射波があり、之により児頭の位置を明白に探索する事が可能である事がわかつた。尚、本法により、無脳児の妊娠例を発見したので此の症例を発表する。

第14群 新生児（生理）に関する問題

158. 新産児及び未熟児の生理及び病理に関する研究

（日赤本部産院） 三谷 茂、中嶋唯夫、北村 益
丸山英一、村瀬道雄、宗田太郎
尾見義信、堀口和之、後藤明代
堅石和雄、柳下 晃

我々は既に新産児、特に未熟児に関して物質代謝等種々の角度からの考察を行い、且つ発表して来たが、更に従来の研究を進めつゝあるので、今回は其の後の新知見につき報告したい。

1) 新産児、未熟児に関しての研究の掘下げと共にその保育、栄養法等にも之を実際的に改善、種々の創意工

夫を凝らしつゝある。母乳と粉乳との未熟児栄養学上の差異について更に検討を加え、又従来の強制栄養法に関して新たに久慈式点滴持続カテーテル栄養法の採用に依り保育成績の向上を計っている。

2) 脂質代謝に関して、従来の諸報告値は報告者に依り相当の動揺が見られるので、新たに凍結乾燥処理を実施し、従前の値との比較検討を、又新たに臓器脂質含有量の態度につき実験を行つている。

3) 電解質代謝の面では、従来の我々の基礎的研究を基に、間脳、下垂体—副腎系の動きに対する臓器内電解質の態度を検討、エオジン細胞テスト、ケトステロイド測定、ウロペプシン曲線の追及等による新産児の副腎皮

質の機能に關しての從來の知見を再検討した。

4) 糖質代謝に關する從來の基礎的研究を基とし、胎児に特有なる低血糖の検索の一助に母体血と臍帶静脈血中の血糖値の比較、家兎実験に依る葡萄糖の胎盤通過の状態を時間的に追求した。

5) 新産児及び未熟児の主要臓器を中心に組織化学的な検索を行い、その妊娠中毒症との關係、絨毛性性腺刺激ホルモンの母体負荷に依る動物実験時の間接的影響をも比較検討中である。

159. 生下時体重と足蹠計測値

(仙台通信) 後藤 伸

分娩異常を來たす多くの疾患のうち骨盤位分娩の占める率は非常に大きい。骨盤位分娩は分娩回数、産道の伸展性、異常、陣痛の強弱、年齢、その他の異常合併の有無、術者の手技等によりその難易の程度の異なるのは当然であるが、胎児の發育特にその体重と密接な關係がある。骨盤位分娩と新産児予後との關係に於て生下時体重2800g以上と以下に於て有意義な差を示すといわれて居る。

胎児体重を一定条件下の母体腹部レントゲン撮影により計測推算する方法もあるが、実地応用上難点がある。

私は当院に入院分娩直後の新産児 200例（正常分娩、骨盤位、帝切児一切を含む）について生下時体重、身長、頭囲、胸囲等の他に足蹠の測定を行い体重との關係を見た。

足蹠測定は第1趾を含めた長さを足蹠長とし（第1趾は伸展せずそのまゝの状態に測定）含めない長さを足蹠位とした。200例中生下時体重3000g以上のもの 108例、以下のもの92例であり、標準体重3000g、身長50cmの場合足蹠長は7.5cm、短は6.2cmであつた。

足蹠短と体重に於てはその關係は認めがたいが、足蹠長測定に於て生下時体重3000g以上のもの 108例中7.5～8.0cmのもの44例、8.0～8.5cmは41例、8.5cm以上のものは9例であつた。即ち108例中94例は7.5cm以上であつた。勿論個々の例に於て多少の変動はあるが、標準値7.5cm以上の場合特に8.0cm乃至8.5cm等の場合は胎児体重もそれに應じ3000～3500乃至それ以上となる可能性の多い事が考えられる。

160. 最近12年間に於ける新生児生下時体重の実態と推移とに就いて

(長崎大) 福居謙三、岡 武
黒氏謙一、宮副亮典

最近、新生児の体重が増したのではないかと云う印象を折に触れ感じるのであるが、果して如何であろうかと

云うことを確める目的でこの調査を行つた。即ち、從來、日本人の新生児生下時体重は、満期産児で2,800～3,000gであると云われて來たが、最近はむしろ3,000gを割る方が少いように思われる。

我々は、当長崎大学医学部産科婦人科学教室臨床に於ける、昭和22年から昭和33年末迄の12年間の入院分娩に依る出生児の生下時体重に就いて、その実態と推移とを調査した。その対象は、同期間の全出生児のうち、品胎・奇形等を除く4,670児で、その76%、3,560児が満期産児（妊娠第39週始——第42週末分娩に依る出生児）である（♂2,448中76%1863児、♀2,222中76%1697児）。

満期産児の生下時体重は、昭和22～25年の♂2,980±28g ♀2940±31gに対して昭和30～33年の♂3,130±13g、♀3,070±13gであり、その間の昭和26～29年では♂3,080±14g、♀3,030±14gと云う値を得た。当初4年間と最近4年間との間には、明らかに著明な差があることが検定の上でも認められる。又昭和20年以前に發表されている他の諸調査の値との比較に於いても、明らかに差が認められる。

生下時体重は、人種、性、母体経産、母体年齢、父母の体質・体格、母体の栄養等に關連する処大であると云われているが、我々の12年間のサンプルの母体年齢の分布や経産回数の分布に於いては、年次的に差異は認められないが故に、その為の生下時体重の変動はさして考慮され得ない。母体の体重・身長との關係に於いては、新生児生下時体重は母体の体重と比較的關連が深いようである。即ち、生下時体重が順調な上昇をたどり、水平的推移に移り始めた昭和27年からは、母体体重に対する新生児生下時体重の比は常に♂0.055～0.056の間、♀0.054～0.055の間と云う一定の値を得ている。

又、戦後の新生児生下時体重の低下は、母体栄養の極度の障害とも考えられているが、その後約10年間の体重増加は唯に戦前の水準に復歸するのみに止らず、水準自体を高めるに至つたと考えてよいのではなからうか。

人の成長期には、從來の統計上、2つの旺盛な期間があつて、その1つが胎内にある時から5～6才迄であるとされているが、胎内に於ける成長發育の最大の要因としての母体となるべきものの栄養状態改善又は体位の向上に連なる問題として新生児生下時体重の増大も既定の現象と考えられるのではなからうか。

161. 早産児及び過期産児の生下時体重に関する臨床的考察